

Henderson the Rain King

〈ただ在ること〉をめぐって

今石正人

I

ウィリアム・バレットはその著 *Irrational Man* を次のように書き出している。

「自分が存在していることをほとんど意識できないほど、自己の生から注意をそらされているうかつな男が、ある朝目覚めて、自分が死んでいるのを発見した。」¹⁾

この「うかつな男」は、我々現代人の状況を端的に言いあてていると言えないであろうか。まず第一に、彼は自分の生からあまりにも注意をそらされている。第二に、彼の視野の中に死は不在である。第三に、これらの結果、彼は実在感の喪失、つまり「自分が存在していることをほとんど意識できない」ことに悩んでいるのである。

Saul Bellow の *Henderson the Rain King* (以下 *H.R.K.* と略す) の主人公ヘンダーソンは、まさに「うかつな男」である。巨万の富を相続し、物質的にはなにに不自由ない身分でありながら、現実感覚は稀薄で、“I want, I want” という内なる声に悩まされながら、何が欲しいのかは漠として掴めず、やみくもに体を動かしてつづけるのだが、精神は澱んでいるのである。

この小論では、ヘンダーソンの状況と、彼がその状況から抜け出し、人間にとっての現実に目覚めてゆく過程を、ペローのエッセイを手懸りにして考察してみたい。

II

H.R.K. 出版の二年前の1957年、ペローは *Distractions of a Fiction Writer* というエッセイを発表した。その中で、彼は現代社会における *distractions* (人の注意をそらせるもの) について次のように述べている。

商品の巨大な生産者たちは、我々の無防備な注意力を必要としている。彼らは走り回って我々を掴まえ、耳や目から車やタバコや石鹸の商品名を注ぎ込む。それからニュースや情報も我々の注意を拡散させる。下手な芸術もそうだ。純正の文化も気を散らせる。最後に、我々の内部には記憶、欲望、空想、不安の要求がある。外部の巨大な混沌が我々を内部へと追い込み、そして我々の内部の小さな領域で我々は好みの気晴らしに耽っている。

The giant producers of goods need our defenseless attention. They catch us on the run and through the eyes and ears fill us with the brand names of cars and cigarettes and soaps. And then news and information distract us. Bad art distracts us. Genuine culture is also, as I've already noted, distracting. Lastly, there are the inner demands of memory, desire, fantasy, anxiety, and the rest. These are perhaps the most tyrannical. The great outer chaos drives us inward, and in our own small kingdoms we indulge our favorite distractions.²⁾

ここでペローが分析しているのは二種類の *distraction* である。一つは、現代のアメリカ社会が作り出す外的なそれ、もう一つは、人間の意識の内部に巢食うそれである。

この外的 *distraction* が1950年代アメリカの「肥大した、無気力な裕福さ (a fatty and nerveless state of "wellbeing")」³⁾ によってもたらされ著しく強化されていることは、ペローも繰返しエッセイの中で述べている。裕

福な中産階級に支えられた物質至上主義は、逆にあの「うかつな男」のように、生そのものから人々の注意をそらせてしまう、とペローは感じているのである。更に別のエッセイで、彼は次のように指摘する。

貧乏人の生活は我々を感動させ、同情を目醒めさせるが、しかし彼らの運命を単に物質と快適さを増大させることによって改善するのであれば、彼らの窮乏の経験に基づいた現実感覚を彼らから奪うことになる。

The lives of the poor move us, awaken compassion, but improvement of their lot merely by the increase of goods and comforts deprives them of the sense of reality based upon their experience of scarcity.⁴⁾

たしかにヘンダーソンは大富豪であり、その分だけ現実感覚を失っており、自分の魂は眠っていた (I slept through my life. p.334)⁵⁾ と感じていたと言えるであろう。

しかし、ペローが *H.R.K.* で問題としていることは、単に裕福さに象徴されるアメリカ文明の孕む危険性ということではなく、むしろ重心はもう一つの *distraction* にある。ペローは現代人の意識に内在する *distraction* を次のように表現する。

彼は不本意ながらも、虚栄心に囚われている。彼は又、人生の雑音、叫び声、主張や反主張や、白日夢、欲望、完全の域に達しようとする野心や、空頼みや過失や死の不安によって聾にされている。

He...is subject to vanity, not willingly. He also is deafened by the noise of life, by cries and claims and counter-claims and fantasy and desire and ambition for perfection, by false hope and error and fear of death.⁶⁾

これはしかし、現代のアメリカ人のみに固有な問題なのではなく、人間存在そのものが孕んでいる実存的な症状である。特に死の不安に関してはそ

うである。そしてペローが H.R.K. で意図したのも、死の不安に他ならぬ。彼はこの作品についてコメントを加え、次のように語っている。

ヘンダーソンが本当に求めているものは、死の不安に対する治療である。彼が堪えられないのは、この継続する不安であり、漠然とした曖昧な不安である。それを我々は人生の条件として受け入れているのだが、彼は無鉄砲にも反抗しようとしているのである。

What Henderson is really seeking is a remedy to the anxiety over death. What he can't endure is this continuing anxiety: the indeterminate and indefinite anxiety, which most of us accept as the condition of life which he is foolhardy enough to resist.⁷⁾

今、このコメントと、前述の distraction に関するエッセイを重ね合わせると、その先にパスカルがパンセにおいて洞察した、いわゆる「気晴らし」が透視できるであろう。ペローの言う distraction は、パンセでは次のように表現される。

人間は死と悲惨と無知とをいやすことができなかったので、自分を幸福にしようとしてそれらをまったく考えない工夫をした。(168)

みじめな我々を慰めてくれる唯一のものは気晴らしである。…だが、気晴らしは我々を楽しませ、知らず知らず死に至らせる。(171)⁸⁾

死への不安から、人間は種々の気晴らしを作り出し、死を意識の埒外に追いやるが、そのことによって、人間は自分にとっての本来的な現実から遠ざけられ、生と死という緊張関係は崩壊し、生そのものが弛緩し激む。この現象こそ冒頭で引用した「うかつな男」の症状であり、ヘンダーソンの抱えている問題なのである。もちろん不可避な運命の冷酷さを和らげようとするさまざまな手段を生み出すことの可能なアメリカの物質文明、あるいはアメリカ人の楽観主義そのものに対するペローの批判は、彼のエッ

セイの随所にみられるが、*H.R.K.* では、現代のアメリカという時間空間を超えて、過去二百年、西欧の近代人の意識に起ってきたドラマそのものを、彼は提示しようとしているのではないだろうか。

III

H.R.K. は次のような書き出しで始まる。

ぼくが五十五歳にして、アフリカ行き切符を買いこんだときの状態を思うと、いっさいが嘆きの種ならぬはない。もろもろの事実が群がり迫ってきて、まもなく胸は重苦しくなる。万事ごちゃごちゃと一両親も、妻も、女たちも、子供たちも、農場、動物、ぼくの習慣、金、音楽のレッスン、ぼくの酔態、偏見、野性、いや、歯も、顔も、魂までが入り乱れだした。叫ばざるをえないのだ。「いや、いや、退っとれ、ちくしょうめ、わしを放っておいてくれ！」と。だが、向こうだって、やすやすと放っておけるものじゃない。万事がぼくに所属する、ぼくのものなんだから。で、四方八方からなだれこんでくる。混沌そのものだ。

When I think of my condition at the age of fifty-five when I bought the ticket, all is grief. The facts begin to crowd me and soon I get a pressure in the chest. A disorderly rush begins—my parents, my wives, my girls, my children, my farm, my animals, my habits, my money, my music lessons, my face, my soul! I have to cry, “No, no, get back, curse you, let me alone!” But how can they let me alone? They belong to me. They are mine. And they pile into me from all sides. It turns into chaos. (p.3)

ここに、ヘンダーソンの distraction のすべてが象徴的に表現されている。彼の内部では、もろもろの事実が混沌としてひしめき合い、ぼくの、ぼくの、ぼくの…という自己中心的な意識は、何が自分にとって本質的な事柄であり、何が枝葉末節なことであるのか、区別をつけられないでいる。奇

妙に肥大した自意識は、「ありとあらゆる奇形、異常を育て (grow all kinds of deformities and enormities p.334)」、彼にとっての現実には、「ぼくのもの一つまりぼくの似姿で満ちあふれている」(it was mine—filled, flowing, and floating with my own resemblances p. 167)。」結局、どこに本当の現実があるのかわからなく、彼は苛立つ (And where's reality? I ask you, where is it? p. 87)。こういう状況だからこそ、彼は自分が他者からも、社会からも、人生そのものからも疎外されていると感じざるを得ない (I have never been at home in life. p. 84)。彼にとって、人生は Waste Land と映り、自分自身は卑少な自意識という牢獄に閉じ込められていると感じているのである (my life and deeds were a prison. p. 284)。

彼のアフリカ行きに直接の動機は、ヘンダーソン家のお手伝いの婆さん Miss Lenox の死を目撃したことにある。冬の朝、食事を作りに来るはずのお婆さんの姿が見えないので、彼女の住む小屋に出かけて行って、彼女が死んでいるのを発見し、ヘンダーソンは、茫然と立ちつくしてしまう。

ああ、何てこった。ああ、やりきれん。どうしてこんなことが、なぜこうなっちゃうのか？ いったい、ぼくらは何をやってるんだ。最後に待ち受けているのは、小さな泥の部屋、窓もない小部屋。おい、ヘンダーソン、ともかく踏み出せよ。うかうかしているとこの病いでやられちゃう。死に滅ぼされて、何ひとつ残りはせん、残るのはがらくたばかり。今までそうなんだから、これからだって、変わりはないぞ。まだ何かがあるうちに——そら、今のうちに、何がなんでも脱け出すんだ。

“Oh, shame, shame?! Oh, crying shame! How can we? Why do we allow ourselves? What are we doing? The last little room of dirt is waiting. Without windows. So for God's sake make a move, Henderson, put forth effort. You, too, will die of this pestilence. Death will annihilate you and nothing will remain, and there will be nothing left but junk. Because nothing will have been and so nothing will be left. While something still *is—now!* For the sake of all, get out.” (p.40)

小さな汚れた、窓もない小部屋は牢獄のイメージであり、それはそのままヘンダーソンの閉塞した精神の象徴でもある。がらくたの山に象徴されるアメリカの物質的繁栄の中で、精神は眠ったまま生きながら死んでいたお婆さんの姿に、ヘンダーソンは、自分も同じ死にざましかできないのではないかという強烈な恐怖心をひきおこされるのである。彼にとって、死が彼をまったく滅ぼしてしまうという考えは、何よりも受け入れることができないので (I've never been able to convince myself the dead are utterly dead. p.30)、死は彼にとっては非現実とした映らない。しかし、彼にとっての現実とは、前述した通り、混沌としており、しかもその現実が本物ではないのではあるまいか、という疑惑に絶えずうるさくつきまどわれているのである。そこで彼は「この世は混沌が支配しているわけではなく、夢の中を弱々しく忙がしげに、孤立無援のまま忘却へ急ぐ、これが人生ってわけじゃない (chaos doesn't run the whole show. That this is not a sick and hasty ride, helpless, through a dream into oblivion. p. 175)」ということを経験すべく、新しい現実、彼を夢から解き放つ本質的な現実を求めてアフリカに出かけてゆくのである。これはまさに「人生の根本的な事実のみに対面し、それが教えようとしているものを私が学ぶことができないものかどうかを知ろうと欲し、私がいよいよ死ぬ時に、自分は生きなかったということを発見することがないようにと欲し」⁹⁾ 森へ入った、ソーローと全く同じ心境である。事実、ヘンダーソンは、アフリカにきた目的は「本質的なもの、ひたすら本質的なものを見すえる (to see essentials, only essentials, nothing but essentials. p. 161)」ことであると語るのである。

では、「文明」を逃れて、アフリカという「荒野」に出かけて、ヘンダーソンは彼の生にとって根源的なものに遭遇することができるのであろうか。

IV

アフリカでの魂の遍歴が始まるが、ヘンダーソンは容易には文明 = *distractions* を捨て去ることはできない。最初に訪れたアーニューイ族は早魃に悩まされている。部落には水を満々とたたえた貯水槽があるのだが、カエルがそこに棲みついでいて、彼らは水が汚染されていると信じているのである。これを知って全くの善意から、彼は文明の利器(弾薬で作った爆弾)で、カエルを爆死させようと試みるが、誤って貯水槽そのものまで破壊してしまう。次に訪れたワリリ族では、Dahfu という部族の王と親しくなり丁度行なわれていた雨乞いの儀式に参加し、土人の誰も持ち上げることのできなかつた「曇の女神」の像を持ち上げ、雨を降らせ、「雨の王」に祭りあげられる。そしてその場で真裸にされ、土人たちに追い回され、泥だらけの家畜用の用水池に投げ込まれる。この場面は、ヘンダーソンが身にまもっていた「文明」を剥ぎ取られることを暗示しているのだが、それは単に、外的な *distraction* から解放されたことにすぎず、死の不安、欲望、虚栄といった内的な *distraction* がつめ込まれた彼の自我を捨て去ることを意味しているのではない。この自我こそ、現実から観念の世界に逃避し、思想と感覚、観念と肉体との分裂をもたらし、自らを疎外する、近代人の宿命とも言うべきものであり、ヘンダーソンにとっては「古い自我」(the old self) であり、「八百ポンドの荷物」(an eight-hundred-pound load. p. 275) に他ならない。しかし、アフリカの部族の王でありながら、若い頃留学し、西欧の近代医学を学び近代以降の文明によってもたらされた諸問題を知悉しているダーフ王にとって、ヘンダーソンの病状を診断することは、さほど困難なことではない。彼はヘンダーソンに向って「君の意識はとかく自己を孤立させ、そのためひどく縮こまり、まるまってしまう (The tendency of your conscious is to isolate self. This makes you extremely contracted and self-recoiled. p.264)」と忠告を与え、すすんでヘンダーソンを治療しようとする。

彼はまずヘンダーソンを、地下にあるライオン Atti の檻に連れて行く。アッティはダーフ王のペット・ライオンである。彼によれば、人間はライオンから多くのことを学ぶことができる。ヘンダーソンが古い自我を捨て、現実が目が開かれるためには、まず、ライオンの真似をして、四つんばいになって咆えなければならぬ、そうすることによって「与えられた状態」(the states that are given)と「作られた状態」(the states that are made p.263)の区別をつけることができるというのである。この「与えられた状態」とは、与えられた現実、あるがままの現実のことであり、ホイットマンによって謳われた「ただ在るだけで充分の状態」(Enough to merely be! Enough to breathe! Joy Joy! All over joy p. 160)のことである。この状態において、あらゆるものの価値は、そのものの特質や、そのものが何であるか、などということにはなくて、まさにそれ自身が存在していることにある。逆に、作られた状態とは、人間によって作り出された現実であり、そういう現実においては、神によって創造され、目的を賦与されたという本来的な存在のあり方はなく、人間は歴史的現実の中で、行為することによって自らを作り出してゆかねばならない。だから、こうした作られた状態の中では、アッティのように「全身ことごとくライオンに成り切っていて、生来の素質に逆らうことをしない。百パーセント、与えられたものに合致している (Atti is allion. Does not take issue with the inherent. Is one hundred per cent within the given. p.263)」ということは、とうてい望み得ないのである。繰り返し述べてきたように、ヘンダーソンは、人間の生にとって本質的な条件である死におびえ、さまざまな distraction に耽り、自我のみが肥大し、そのことによって、かえって「与えられた現実」から遠ざけられているのである。

ダーフ王は更に、ヘンダーソンにライオンに成り切って欲しい、と要求する。そうして想像力を働かせて、自分がライオンとして周囲を思い描くと、「与えられた現実」が見えてくるというのである。

空、太陽、そしてジャングルの獣たち。彼らみんなとつながっている

んです。ぶよまでがあなたの身内ですよ。空こそあなたの思想、葉っぱこそあなたの支え、ほかには何もいらぬのです。星たちの言葉は、終夜さえぎるものなく、語りつづけます。

The sky, the sun, and creatures of the bush. You are related to all. The very gnats are your cousins. The sky is your thoughts. The leaves are your insurance, and you need no other. There is no interruption all night to the speech of the stars. (p.266)

このようにして、一旦ライオンに成り切って「与えられた現実」に気付けば、おのずと本来的な自己のあり方もわかるし、古い自我を捨て去り「ただ在ること」に歓びをもって生きることができるといっているのである。

たしかに、ダーフ王の処方箋によって、ヘンダーソンは、ある程度の成果をおさめる。妻の Lily にあてた手紙の中で、彼が、自己強調癖 (ego-emphasis) から抜け出し、他者が彼の意識に入ってきたことを伝える。「ぼくの中に、シタイ、シタイと叫ぶ声が聞こえる。いや、その主体はぼくというより、彼女であり、彼であり、彼らであるべきだった。また、現実を現実たらしめるのは愛である。I had a voice that said, I want I want? It should have told me *she* wants, *he* wants, *they* want. And moreover, it's love that makes reality reality. p. 286)。」

しかし、ペロー自身は、この点に関しては、非常に慎重で用心深く、ヘンダーソンはあまりにも酒に酔っていて、本当に書いたのか、あるいはただ単に思いついただけなのか、憶えていないと付け加えているのである。というのは、おそらくペロー自身が、いわゆる説教、理論、思想というものの持つ効能に、きわめて懐疑的であるからではないだろうか。彼は、我々の社会が、あまりにも知性化されすぎていて、人々は死を恐れるあまり、抽象的な思考に没頭することで、有限性を超えようとするが、しかし彼自身の根源である血と肉から疎外されていると考えており¹⁰⁾、ペローのこの洞察は、H.R.K.の直前に発表されたエッセイ *Deep Readers of the World, Beware* に明確に提示されている。そのエッセイの中で、deep readerは、

感覚 (feeling) よりも意味 (meaning) を大切にし、小説の具体的なところ、個別的なところを感じとることに失敗しており、死だとか激しい感情にであうと、それらを回避しようとして、象徴さがしに明け暮れる、と指摘し、「具体的なもの、個別的なものを救い出し、肉と骨の価値を回復するには、想像力と靈感に頼らねばならない (We must leave it to imagination and to inspiration to redeem the concrete and the particular and to recover the value of flesh and born.)」¹¹⁾ としめくくっている。ダーフ王の理論が理論であり続ける限り、理論としての価値はあっても、一つの抽象にすぎず、それは別の種類の *distraction* に陥る危険性すら孕んでいる。理論で武装して、あるいは、理論を実践するという形で、現実接近しても、現実には決してその姿を開示しないのではないか、むしろ、こうした人間の側の知的な営み、恣意、努力、それに基づく行為を捨て去ったところに、初めて現実との回路が開かれるのではないか、という考えがペローにはあり、その考えは、*H.R.K.* では、副主題とも言うべき “The forgiveness of sins is perpetual and righteousness first is not required” (p. 7.) という文句の中に集約されているのだが、それについては後に触れることにする。

ヘンダーソンの現実との出会い方は、特異である。彼自身、常々、真実 (truth) と一撃をくらうこと (blow) との間に何らかの関係がある、と感じ続けていた。つまり、真実は予期せぬ一撃をくらうことによって、直観的に啓示されるものであり (Truth comes in blows. p.23.), 彼は、自分が決して論理的思考のタイプではなく、インスピレーションなタイプであること (I am the inspirational, and not the systematic, type. p.244), そして逆に、「思考はとかく人間に真実を見失なわせる (ideas make people untruthful. p.245)」と信じているのである。これはそのまま、先に述べたペローの考え方と一致するものである。だからこそ、ヘンダーソンは、自分の魂の眠りが徐々に醒まされるのではなく、一気に、*bolw* として、打ち破られるべきものだと感じているのである。

このヘンダーソンの考え方の根底には、イハープ・ハッサンが指摘した、ペローの宇宙的驚異の感覚が存在している。ペローにとっては、人間の生も、人間をとりまく現実も、究極的には神秘であり、その神秘的な謎に彼は驚いているのである。処女小説 *Dangling Man* にも、すでにその萌芽を見ることができる。主人公のジョーゼフにとっては、善と悪の判断よりも、驚くことの方が大切であり (to him judgement is second to wonder), すべての物は存在するだけで善であり、…そして、それ故、驚異的なのである (Everything is good, because it exists, and for that reason, marvellous.)¹²⁾ 又、前述の *Distractions of a Fiction Writer* においては、あたかも distractions 解体し、人間を現実に目覚めさせる唯一のものとしてのナイーブな想像力、宇宙的な驚異の感覚を、次のように記している。

何故我々は生まれたのか。我々はここで何をしているのか。我々はどこへ行くのか。その永遠に変らぬナイーブさで、想像力はこれらの問いに立ち返ってゆく。

Why were we born? What are we doing here? Where are we going?
In its eternal naivete the imagination keeps coming back to these things.¹³⁾

更に続けて、万人が認めた世界像とか、文化とか、歴史の故に、人間は人間に関心を持つのではなく、関心は人間に内在するものである、とまで言い切っている。であるから、この驚異の感覚に視座を据えると、現実の現われ方は、当然、唐突で直感的であり、「一撃」であり、人間はむしろ、きわめて受動的に、実在の中枢 (the very axis of reality) に直面させられるのである。

事実、ヘンダーソンにとって現実とは「一撃」としてその姿を見せる。ダーフ王とライオン狩りに出かけて、ヘンダーソンは初めて、獐猛な野性のライオンに出会う。その咆哮を聞いた瞬間、彼にとってもはや回避も拒否もできない現実が、死の形をとって撃いかかってくる。

ライオンの咆哮は、まさしく死の声そのものだ。以前にリリーに向けて自慢顔に言ってみせた、ぼくは現実を愛する、というせりふが思い浮かんだ。「現実に対する愛の点で、ぼくのほうが上だぞ」そう言った。しかし、おお、非現実よ、非現実、非現実をこそ！ 現実を愛する、これが、平穩とはゆかぬが、永遠の生活に対するぼくなりの計画だった。しかし、これもライオンの一吠えによって、けし飛んでしまった。ライオンの咆哮は、まさに後頭部への一撃だった。

The snarling of this animal was indeed the voice of death. And I thought how I had boasted to my dear Lily how I loved reality. "I love it more than you do," I had said. But oh, unreality! Unreality, unreality! That has been my scheme for a troubled but eternal life. But now I was blasted away from this practice by the throat of the lion. His voice was like a blow at the back of my head. (p.307)

この瞬間まで、ヘンダーソンは死を非現実と見做してきた。が、ここでは、死は現実として彼に撃いかかる。種々の内的な distractions に遮られて見えなかった現実が、distraction を吹き飛ばされて、彼の前に顯示されたのである。彼のいわゆる、「現実を愛する」という気持ちが自己偽瞞にすぎず、現実の抱擁者を自認してきた自分が、結局は、現実の捏造者であることを発見したのである。ここでは、現実＝死であり、事実、ダーフ王はこのライオンに殺されてしまう。

さて、死という現実立ち合わされたヘンダーソンは、この現実全面的に服従する。彼はダーフ王と死を分かち合い、その死を、自己の死と同一視する。ダーフ王の出血を止めようとして、その血を浴びるのである。それから、彼は小さな小屋にダーフ王の死体と共に監禁されるが、この小屋を、彼は「墓」(the tomb) とか「死の家」(the death house) と呼ぶのである。それは、単にダーフ王の墓を意味しているだけではなく、彼自身の墓をも暗示している、と考えられる。そして自己の死と、その超克を、次のように経験するのである。

こうして、昼が過ぎ、夜も過ぎて、翌朝となると、何か空ろで、からっとした軽い気分になった。古桶が浮かびただよっているような感じだ。内側が空ろで、暗く、乾いている。酔いが醒めたように、空っぽだ。空が薄赤い。

Thus the day passed and the night passed, too, and in the morning I felt light, dry and hollow. As if I were drifting, like an old vat. All the moisture was on the outside. Inside, I was hollow, dark, and dry; I was sober and empty. And the sky was pink. (p.314)

かつて八百ポンドの重荷であった古い自我は死に、憑物が落ちたように、酔いが醒めたような、空っぽの軽い自分を感じる。彼の自我強調癖は取り除かれ、自ら抱え込んでいた *distraction* も雲散霧消し、彼はやっと自分が何を欲していたのかを悟るのである。「ぼくの内なる声が、シタイ、シタイと叫んでいる。いったい何がシタイのだろうか…シタイ欲望の相手は、現実だったよ (I had a voice that said I want… what did it want?… It wanted reality. p.318)。」

彼が遭遇した現実には、死であった。死は冷酷で強暴で、彼を不安に陥てきた。しかし、死が人間を取り囲む現実のすべてではない。死を受け容れ、死の不安が鎮められ、そのことによって、死を超克したとき、現実はその美の側面を顕わしてくる。だからこそ、彼の目に、空は薄赤色に映るのである。というのは、この薄赤色は、*H.R.K.* では、宇宙の神秘的な美を象徴しているからである。かつてアーニユ族のカエル討伐の日、ヘンダーソンは小屋の壁に朝の光が差し込み、ピンク色になっているのを見て、たちまち美の予告の感覚が生じ、足元で世界が揺れ出すのを感じる。「強力荘大な、しかも人間離れした何かが、足もとにひそんでいる感じなのである (Some powerful magnificence not human, in other words, seemed under me. p. 100-101.)。」これも、ヘンダーソン＝ペローの宇宙的驚異の体験である。自然的宇宙が、無機質の物ではなく、縮み、変化し、盛り上

がり、高まり、やがて静まってゆく、その宇宙の鼓動に驚いているのである。小さな男の子だった頃、ふとベッドの中で目を覚まし、天井の石膏細工の中に天使の顔を見ながら、鑑戸が同じピンク色に染まっていたことを、ヘンダーソンは憶い出す。しかし、子供の時といい、アーニュー族に滞在していたこの時といい、彼にとって、死は未知、非存在であった。が、ダーフ王の死に立ち合い、自らも死を受容し、超克した今、空は再びピンク色に映るのである。

同様にして、絶えず死に直面しながらも、喜びと高貴さを失なわずに生きたダーフ王の生きざまが、決して非現実的なものではなかったと、ヘンダーソンは悟る。生と死、美と恐怖、善と悪といった人生のドラマを構成する両極の要素の間に投げ出された人間が、その両極をも与えられた現実として受容することが不可能なことではなく、否むしろ、与えられた現実「ただそのように存在する」ことの中に、ヘンダーソンは人間の本来的なあり方を感じるのである。この死の経験を通して、彼の眠りは破られ、本来の自己に立ち戻る (*the sleep is burst and I've come to myself. p.328*)。そして自己の存在が、大きな宇宙、与えられた現実の一部であることに気付く (*the universe itself being put into us. p.318*)。宇宙は人間と同様、呼吸し、循環し、潮の干満、四季、生のリズムを持っていることに、そして今まで *distractions* に遮られて聞きとれなかったこのリズムを感じとり、一旦、本来的な人間の在り方に気付いた人間は、そのリズムから逃れられないと悟るのである。

H.R.K. の主題は、以上述べてきた通りであるが、この主題に関係する副主題があることを、先に触れた。この副主題は、主題と同様、*H.R.K.* の最初のページに現われる。ヘンダーソンは、ある日、本を読んでいて、「罪の宥しは恒久的なものであり、まず正しき行動が要求されるのではない」という文句にぶつかった。この時も「頭を石で殴られた」(*hit in the head with a rock. p.244*) と述懐している通り、衝撃を受けたのであるが、

この文句は、文字通り、人間は善を為したから、正しい行いをしたから、この世に存在することを宥されているのではなく、まさに存在していること、そのこと自体が宥され嘉されている、という意味であろう。そしてこの文句は、ヘンダーソンが現実に出会い、死を受容し、「ただ在ること」に意義を見出すための方法論を示唆している点で、重要である。ペローはH.R.K. にコメントを加えた中で、この点に関して次のように記している。

彼（＝ヘンダーソン）の努力のすべては、行動、やみくもの行為、あるいは意識的な努力によって、謎に答えを出そうと企てている人々への諷刺である。

All his efforts are a satire on the attempts people make to answer the enigma by movement and random action or even by conscious effort.¹⁴⁾

ヘンダーソンは、Be-er（在る人）になりたい、自分の存在の意味を、誰かに説明したり釈明したりするのではなく、「ただ在ることだけで充分」と謳ったホイットマンの心境に到達したいと願っていた。そして、アフリカでの旅を終えて、ある程度の Be-er になるのであるが、それは決して、やみくもの行為や、意識的な努力の結果、彼が勝ち取ったものではなかった。あるいは、理論や観念をメスに、一枚一枚薄皮を剥ぐようにして、実在の中枢に至ったのでもない。むしろ、人間の側の不断の努力や恣意、理論や観念、さまざまな distraction を放棄した時、もっと正確には、そういったものが、現実の持つ手に負えない強烈な力によって吹き飛ばされた時、与えられた現実が彼の前に姿を現わしたのである。まさに、ヘンダーソンが、「たとえてみれば、しょっちゅう、うるさい音を立てるというのをよせば、美しい音が聞こえてこよう。鳥の声も、聞こえてくるというわけだ (Like if I stopped making such a noise all the time I might hear something nice. I might hear a bird. p.284)」と予感した通りである。

V

「ヘンダーソンは果して生まれ変わったのか。」この問いはしばしば批評家によって問われてきた。そして彼らの多くは否定的である。例えば、J.J. Clayton に代表させて言えば、「ともかく肯定があまりにも安価になされている。…我々は彼が根源的に変わったとは信じられない。ペローは我々に、ヘンダーソンは死に直面できたし、現実に熱中できるようになったと言うが、我々にはただその言葉しか与えられていない。」¹⁵⁾ たしかにそうである。諷刺という形式でありながら、ヘンダーソンの苦悩や絶望、苛立ちは妙に生々しく説得力を持っている。が、逆に、彼の死—再生はどこか非現実的で抽象的で曖昧である。事実、彼が死と再生を経験する部分において、彼の意識は曇って霞んでいる。譫妄 (delirium), 精神的欺瞞 (mental deceit), 夢 (dream), 幻覚 (hallucination) という言葉が頻用され、彼は熱に悩まされ、発狂し、うわごとをしゃべり (demented and raving p.327), 帰国する飛行機に乗り込むまで、病気が尾を引いて着着かなかった (I was too ill and in too much confusion. p.332) のである。これは何故か。ヘンダーソンは長い眠りから目覚めたばかりでまだ夢とうつつの間を漂っていたからか。ヘンダーソンの意識が明晰すぎると、小説としてのリアリティーを欠くことになるという問題があるからか。たしかに、現代において、回心というような問題は、現実のレベルではなく、むしろ神話的次元でしか起こり得ないという一般的認識はあるであろう。しかしそれ以上に、ペロー自身がヘンダーソンの再生にどちらかという懐疑的なのではないだろうか。もちろん、ペローの宇宙的驚異の感覚は彼の一面ではあるだろうが、どこか肩肘を張った調子を見捨てることができない。むしろ「もちろん現代では、人はなりたいたいと思ってもナイーブになれるものではない (Of course it's hard in our time to be as naive as one would like.)」¹⁶⁾ というさりげない一行に、ペローの地声が聴きとれる気がするのである。たとえナイーブであり得たとしても、彼の前に立ちはだかる数々の distraction は重く厚い。回心する

というよりも現状維持で精一杯なのではないか、そうしたシニカルなペローの声さえ、H.R.K. の結末の曖昧さの中に聞きとれないことはない。実際、H.R.K. の前の *Seize the Day* においても、さまざまな重荷を背負わされた主人公が、象徴的な死を迎える場面で小説は終り、再生は予感として暗示されているにすぎない。H.R.K. の後の *Herzog* にしても、主人公が「ぼくの願いは…あるがままのぼくであること、定められたままに生きること、そしてこの世に生きていられるかぎりぼくはそれに満足している (What do you want Herzog?… I am pretty well satisfied to be, to be just as it is willed, and for as long as I may remain in occupancy)」¹⁷⁾ という H.R.K. のテーマの倍音で終わってはいるものの、ハーツォグ=ペローは、「この頭が狂っているにしても、苦にすることはない」(If I am out of my mind, it's all right with me.)¹⁸⁾ と認めざるを得ないのである。

「ヘンダーソンは生まれ変わった」と断言するほどに、ペロー自身も楽天的ではない。H.R.K. は、現代という時代や、人間に固有な問題に盲目な、単なる信仰告白からは程遠い。又逆に、荒地に生きる悲惨な人間についての、単なる正確な記録でもない。ペローは、ヘンダーソンを通じて、人間が人間として存在して以来の、そして特に近代以降の西欧の、自我の問題を正面に見据え、それを透視したところに「ただ在ること」「今、ここに存在すること」の歓びという、一つのビジョンを、垣間見ようと目を凝らしている。ヘンダーソンが生まれ変わったかどうかを判定するには、問題はあまりに複雑で微妙である。むしろそれはペローが信じるように、論理的帰結として判断されるべき問題ではなく、想像力と宇宙的驚異の感覚を通して、直感されるべきものであろう。ペローの結末における意図が何であれ、少なくとも、現実とヘンダーソンの間に存在していた爽雑物 (外的 distraction) と、彼の古い自我そのもの (内的 distraction) が、共に放棄され、そしてまさにこの意味において、彼と、本来的な現実との回路が開かれ、再生への出発点が約束された、と言えるのではないだろうか。医者になるためのアメリカでの生活は、先のことである。ニューファウンドランドに給油のため着陸した飛行機の回りを、「大いなる極地の沈黙の、純白な裏

張りの上を、跳び上がり、足踏みならし、ひりひりする寒気に身をさらしている (—leaping, leaping, pounding, and tingling over the pure white lining of the gray Arctic silence. p.341.)」ヘンダーソンの姿に、「今、ここに在る」ことの歓びが結晶となって輝いているのを読みとるのは、読みすぎであろうか。

NOTES:

- (1) William Barrett, *Irrational Man*, (New York: Doubleday & Company, Inc., 1958), p.3.
- (2) Saul Bellow, "Distractions of a Fiction Writer," in *Herzog: Text and Criticism*, (New York: Viking Press, 1976), p.371.
- (3) Saul Bellow, "The Swamp of Prosperity," *Commentary* (July, 1959), p.79.
- (4) Saul Bellow, "The Uses of Adversity," quoted in Tony Tanner, *Saul Bellow*, (Edinburgh: Oliver & Boyd, 1965), p.3.
- (5) Saul Bellow, *Henderson the Rain King*, (New York: Viking Press, 1959), p.334. (以下 *H.R.K.* からの引用は引用の最後にページ数を記した。日本語訳は佐伯彰一氏の訳によった。)
- (6) "Distractions of a Fiction Writer," p.372.
- (7) Nina Steers, "Successor to Faulkner?" *Show* 4 (September, 1964), p.38.
- (8) Pascal, *Pensées*, (New York: E.P. Dutton, 1956), p.49.
- (9) H.D. ソーロー, 著 神吉三郎訳「森の生活」上巻 岩波文庫, p.129.
- (10) Keith Michael Opdahl, *The Novels of Saul Bellow: An Introduction*, (University Park: The Pennsylvania State University Press, 1967), p.22.
- (11) Saul Bellow, "Deep Readers of the World, Beware," in *Herzog: Text and Criticism*, p.368.
- (12) Saul Bellow, *Dangling Man*, (Harmondsworth: Penguin Books, 1963), p.24.
- (13) "Distraction of a Fiction Writer," p.384-385.
- (14) Steers, "Successor to Faulkner?" p.38.
- (15) John J. Clayton, *Saul Bellow: In Defense of Man*, (Bloomington: Indiana University Press, 1968), p.185.
- (16) "Deep Readers of the World, Beware," p.367.
- (17) Saul Bellow, *Herzog* (New York: Viking Press, 1964), p.340.
- (18) *ibid*, p.7.